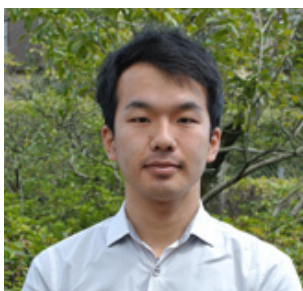


立命館大学 政策科学部

現代社会に起こっているさまざまな問題は、どれも互いに関連しあっていることを忘れてはなりません。政策科学部では、この複雑に絡みあう社会の諸問題を広い視野で見つめ、探究し、解決方法を提言できる人材の育成を目指します。



■大学生
木下浩輝さん



■先生
佐藤満先生



■卒業生
市川良一さん

CONTENTS

- プロフィール
- 大学生活について
- 就職活動、仕事について
- 5年後に向けて
- 高校生へのアドバイス

●プロフィール

立命館大学 政策科学部の特長を教えてください。

■先生

本学の政策科学部は 1994 年に誕生しました。私は設立構想の段階から携わっていましたが、当初、単純な経済分野から派生した学部にはしたくない。つまり、問題解決のための正解や科学的な解決策が最初にあってそれを学生に教えていくのではなく、様々な意見を出し合う民主的な過程を経て問題解決に至る策を追求するスタイルにしようと考えました。言うならば本学部はボトムアップ型での学びの中で政策形成を議論できる力を学生に養ってもらおうというものです。この理念は設立時から現在に至るまで本学部の根底にあります。



2015年4月から新しいキャンパスに移転されました。

■先生

新しく誕生した OIC（大阪いばらきキャンパス／ Osaka Ibaraki Campus）での学びは、「アジアのゲートウェイ」「都市共創」「地域・社会連携」という3つのコンセプトのもとで行われます。もともと本学部は世界各地の110の大学と提携していて、これまで研究交流や学生交換のプロジェクトを数多く実施してきました。今後は、さらにキャンパスコンセプトに根差した学びを実践する機会は増えるでしょう。各地域に存在する問題や課題を発見し、こういった解決策が有効なのか、時には地元地域と連携し、さらにアジアをはじめ世界のフィールドにまで視野を広げ、学生自らが考察を深めていくことになります。

■卒業生

私は本学部の1期生ですが、在学時代は韓国で公害問題に関するフィールドワークを経験しました。そういう意味では新しいキャンパスが掲げる「アジアのゲートウェイ」というコンセプトは当時から実践できていたのかもしれません。

市川さんは現在こういった分野で活躍されていますか？

■卒業生

株式会社 AGUA JAPAN という環境ソリューションを提供する会社に勤め、関西支社で蓄電池の遠隔監視とリユースのビジネスを主に担当しています。近年、民間企業や家庭での太陽光発電が注目され、「創エネ」に期待が集まっていますが、再生可能エネルギーは蓄電池で一時貯蔵する“蓄エネ”がセットにならないと有効に活用できません。そうしたビジネスを積極的に開拓しています。

■先生

市川くんとの付き合いはずいぶん長いですよ。もう20年以上になるね。

■卒業生

在学時は佐藤先生のゼミ生ではありませんでしたが、政策科学部の1期生ということもあり、課外活動や自治会活動など様々な面で大変お世話になりました。

木下さんは佐藤先生のゼミで学ばれているのですか？

■大学生

はい。3年生から先生のゼミに入って勉強しています。ゼミに入った当初は「リーダーシップ論」を研究しようと考えていたのですが、先生からもう少し具体性を持った研究テーマにしたほうがいいとアドバイスをいただき、もう一步踏み込んで時の政治家にフューチャーした「田中角栄から見たリーダーシップ論」の研究に取り組んでいます。

■先生

木下くんは本学の「将棋研究会」に所属していて、彼が長（おさ）を務めるようになってからはずっと成績がいいんですよ。まさにリーダーシップのおかげだね。

■大学生

いえいえ、お恥ずかしいです。ただ、好成績を残していると言っても実際に将棋を指しているのは他のメンバーなので…。僕はもうプレイヤーではないので、そこは正直複雑な気持ちです（笑）。

■先生

はははは。

先生が専門に研究されている分野は何でしょう？

■先生

「政治過程論」が私の専門です。政治の問題や政策に関わる問題を解決するためには民主的な流れの中で様々な思いを持ったアクター（行為主体）が参加します。そこで相互に、それぞれが影響力を与え合いながら何らかの策をプロセス（加工）していくわけですが、私が専門にしているのは、このプロセス（過程）を記述・説明することです。専門的には政治過程論と呼ばれています。政治過程論の研究者の仕事は、過程の記述・説明それ自体と、説明をうまく行うための切れ味のよい理論的道具を整備することにあります。この記述・説明と道具の整備をともに行わねばなりません。

●大学生活について

政策科学部を志望した理由を教えてください。



■大学生

僕はまず「政策科学部」という名前に惹かれました。多角的な学問に取り組める印象を受け、実際にどういったことを学べるのかホームページなどで調べてみると、政治学をベースにしながら様々な分野に派生して自分の学びを追求できることを知りました。そこが魅力で志望しました。

■先生

実際に入学してどうだった？

■大学生

最初は主に政治学系の授業を選んでいましたが、他にもマクロ経済学といった経済学系の授業なども選択していくうちに、「多角的に学ぶとはこういうことだ！」と実感できるようになりました。入学前に思い描いていたイメージに近かったので、政策科学部に入ってよかったと感じました。

市川さんが志望された理由は？

■卒業生

私の場合、新設学部だったことが大きな志望動機でした。1期生ですから当然先輩たちはいませんけど、だからこそ自分たちで何か面白いことができそうだと感じたんです。

あとは立命館大学の広報戦略も非常に上手でしたので、その影響も少なからずあったかもしれません(笑)。受験説明会に参加した際、話がとても面白く、ますます入学したいという気になりました。

■先生

当時私もよく説明会の場に足を運んでいたけど、そんな広報担当者っていたかな？

■卒業生

それがいたんですよ。今でも時々記憶がよみがえり、「あの人は誰だったんだろう？」と思うことがあります。

印象に残っている授業などがありますか？

■卒業生

座学で学んだ理論を自分たちで実践する機会がかなり多く、非常に印象に残っています。実際に課外活動や大学の自治活動といった場で様々な経験ができました。

■先生

市川くんの頃は、とにかくそうした活動が盛んだったよね。

■卒業生

はい。1年生の時に阪神淡路大震災が発生した際、本学部が中心になって「ボランティア情報交流センター」を立ち上げましたが、これはまさに私たち1期生が団結して取り組んだ活動でした。

また、在学時に迎えた戦後50年という節目には、立命館大学主催で「世界大学生平和サミット」を行いました。私も実行委員会の立場で世界各国の105の大学から集まった学生を裏方でサポートしました。他には、政策科学部の学生委員会や新入生をサポートするオリター活動の団長を務め、本当によい経験をさせてもらえたと思っています。

■先生

市川くん達の活動は私も目の当たりにしていましたよ。政策科学は実社会の問題を発見し、解決するための手段を学び、実践していく学問です。まさに政策科学の理論を仲間と一緒に実践していたということだね。

木下さんが印象に残っている授業や課外活動は？

■大学生

市川さんが最初にお話しされた韓国に僕も行く機会があり、そこで取り組んだことは印象に残っています。韓国の英語学習環境を学ぶことを目的に、一緒に行った学部生たちとグループワークを行い、僕はリーダー役の学生をサポートする立場で色々学びました。

■先生

いわゆるフォロワー役だね。



■大学生

はい。その立場でグループワークに参加していると客観的に見えてくることがたくさんありました。指示を出すリーダー役の学生を見ると、相手の考えや感情を把握しながら行動しているんだと気づきましたし、もし自分が逆の立場でリーダーシップを執るとしたらどういった振る舞いをすればよいのかなど、そういったことを考える機会になりました。

■先生

組織って実はリーダーばかりでは成立しませんよね。「2:6:2の法則」をご存知でしょうか？ 集団が行動する際、2割の人がリーダーシップを発揮し、6割の人がそれに従うフォロワーになり、残りの2割が何もしない人という役割ができると言われています。韓国でのグループワークで木下くんはフォロワーの立場を経験しました。

一方、本学の将棋研究会では彼がリーダーです。その立場で集団を動かす時は、自分の位置を考え、仲間の行動なども把握し、時に発生する問題に対処することが求められます。実はフォロワーの経験もリーダーの経験も、どちらも政策科学の学びの中では必要なものです。

佐藤先生が教えるときに心掛けていることはありますか？

■先生

まず本学部での学び、4年間の学びについて少しお話ししましょう。1年生では、現実の問題解決の様子を教室空間でシミュレーションする授業が行われます。課題発見のためにグループディスカッションやディベートを行い、批判的思考力と論理的表現力を鍛えるのが主な目的です。

それを経て、2年生になると大学の外、つまり現場へ出て行き、少数集団でグループワークとフィールドワークを行います。現場で生じている様々な問題を知り、実際に携わっている人々の意見を聞きながら調査・考察する力を磨きます。この1・2年の学びが政策実践研究プロジェクトです。

そして3年生からゼミに入り、学生自らが興味のあるテーマで専門的な研究を始め、4年生でその成果を論文にまとめます。

■卒業生

早い年次から専門的な学びを始める学部もあるようですが、政策科学部は違いますよね。

■先生

そう。最初から専門をやってしまうと、何のために政策科学の学問をやらねばならないのかわからなくなってしまう。そうならないためにも、まずは1・2年で政策課題に向き合い、グループワークやディスカッションを中心とした基礎的な演習を徹底することは非常に重要だと考えています。その中でリーダーやフォロワーの立場を経験することも大切です。

私が常々学生に言っているのは「“知恵”をつけなさい」ということです。フィールドワークに出る時は現場に触れて、問題に直面している当事者と接し、自分の頭で考えながら解決の手掛かりとなる“知恵”を身につけてほしい。“知恵”は単なる知識の習得や伝達だけで養えるものではありません。私のみならず学部としてもその点に重きを置いて指導しています。

●就職活動、仕事について

卒業生はどういった分野で活躍されていますか？

■卒業生

私の同期で言いますと、NPO法人（非営利団体）で活躍している人が多いです。高齢者介護の共同組合を立ち上げた人がいたり、地方自治体の首長のブレーンという立場で地域の街づくりをサポートしている人もいます。

■先生

本学部は“世の中のお役に立ちたい”という気持ちで学ぶ学生が非常に多いですから、卒業後は公務員になる人も大勢います。おそらく他の学部より公務員に就く割合は高いんじゃないかな。京都市役所で公共政策に携わっている卒業生がいますね。

■卒業生

他はメーカーや銀行などの民間企業に就職しますが、そのあたりになると他の文系学部と同じような就職先になると思います。

木下さんは今度4年生ですが就職活動は？

■大学生

今活動を始めつつあります。どの分野に行こうかまだ絞り切れていませんが、現時点では製造業を希望しています。大学で学んできた中で、僕は“価値観を形成する過程”を見聞きするのがとても楽しいと感じました。製造業に就くことができれば、仕事の過程を自分自身でも楽しめるでしょうし、そ

うして造ったモノをエンドユーザーに届けることができればやりがいを感じられると思います。

■先生

木下くんのまわりは、他にどういった分野を目指している人がいるの？

■大学生

僕の知っている範囲では、公務員試験を受ける友達がいます。僕も高校時代、漠然とですが公務員になりたいと考えていました。兄がそうだったので当時は影響を受けていた気がします。

市川さんが今の会社に入られた経緯を教えてください。

■卒業生

学部卒業後は、政策科学部の大学院と共同プロジェクトをやっていた研究所に入り、そこで広報やマネジメントの仕事に7年ほど携わりました。その頃、同じ立命館大学で法学部出身の仲間が衆議院選挙に当選し、秘書の仕事を依頼されたので私も政治の世界に移りました。その後、私自身も政治家として京都府長岡京市の市議会議員を1期務めました。

■先生

市川くんはそのまま政治の世界で活躍するだろうと思っていたけど、また民間に戻ってきたね。



■卒業生

政治の現場を離れようと思った理由はいくつかありますが、やはり2011年の東日本大震災は大きな転機になりました。当時、中央の国会議員は危機管理室を立ち上げて一生懸命様々なことに取り組みました。私も当時は与党として仕事に携わっていましたが、自分自身を含めて思った以上に政治家は無力だと痛感したんです…。それでもう一度民間に戻り、地道に、派手さはなくても着実に、世の中に貢献できる仕事に取り組もうと決めました。

政策科学部で学ばれたことは今の仕事につながっていますか？

■卒業生

今勤めている会社の主な業務は環境ソリューションの提案なので、例えば環境対策で困っているお客様がいれば率先してコンサルティングを行います。そういう意味では、政策科学の学問は問題解決につながる策を考えていくものですから、大学時代に学んだことや課外活動で実践してきたことは今の仕事につながっているところはたくさんあると感じています。

● 5 年後に向けて

将来の目標や夢について教えてください？

■大学生

大学卒業後の話になりますが、世の中に出たら 1 人の社会人としての社会貢献ではなく、社会全体の発展を担っていくくらいの気持ちで仕事に携わりたいと思っています。政策科学部では“団体を高度化していく過程”なども学ぶことができましたので、会社に入ってもそうした大きな視点を持って行動していきたいです。

■卒業生

引き続き将棋の活動は続けるのですか？

■大学生

別の団体に所属すれば卒業後も大好きな将棋に関わっていくことができますので、これまで大学の研究会で培ってきたことを活かして活動していきたいです。

市川さんの今後の目標は？

■卒業生

仕事の話になりますが、最初にお話ししました蓄電池のビジネスをもっと積極的に開拓していくつもりです。最近、大手の自動車メーカーが水素で駆動する燃料電池自動車を発売しましたが、これは燃料タンクの技術革新ができたおかげでコストダウンに成功し、市場で受け入れられる価格の実現につながりました。こうしたイノベーションを私は蓄電池の分野でも起こるのではと期待しています。蓄電池の技術革新が実現すれば、太陽光発電や風力発電といった自然エネルギーの供給はもっと安定すると言われています。そういう時代が来るのは 5 年も 10 年も先かもしれませんが、私自身も蓄電池のビジネスを通して世の中に貢献できればと考えています。

先生はいかがでしょう？

■先生

私は定年まであと 5 年ほどですので、その間でできることをやっていこうと思っています。研究面ではまだまだやり残している仕事がありますので。

■卒業生

引き続きどのようなことに取り組まれるのですか？

■先生

以前から「京都市政治研究」というテーマを手掛けていますが、その研究に引き続き取り組んでいき

ます。他にも出身大学の先輩や後輩たちと一緒に共同研究を行っているテーマが数多くありますので、定年までの間はずっとやっていくことになるでしょう。

そして立命館大学では、私の研究室に学部生や大学院生がいますので、彼らを社会で通用する人間にしていけることが自分の役割と考えています。

大学院に進学する人は多いのでしょうか？

■先生

一昔前よりは増えていると思います。私はもともと法学部でしたが、当時大学院に進むのは1～2人ほどでした。今は修士課程まではそれなりの人数はいますね。しかし、そこから研究者を目指して次に行く人は本当に一握りです。

政策系分野の研究職市場もそんなに豊かなわけではないですから、研究者を目指すみんながみんな安定した生活を送れるかといえばそうではない。よっぽど優れているか、よっぽど面白い研究をやるか、突出したものがない限り独り立ちするのは難しいと言えるでしょう。

●高校生へのアドバイス

最後に高校生にアドバイスをお願いします。

■大学生

僕の経験でお話ししますと、自分の意見を“自分の頭で考えた言葉”で自信を持って言えるようになったのは、実は大学生になってからです。ですから、高校生のうちに“自分の頭で考える”ことを実践しておく、大学入学後はより成長していける気がします。

進路を決めるにあたって、まわりに流されたり、成り行きではなく、自分の意思で大学や学部について調べ、情報収集を行うことが大事です。そうして自分から行動できる力をつければ価値観を広げることにもつながると思います。

■卒業生

価値観を広げるという点では、高校生のうちから世の中や社会に関心を持つことは大事でしょう。早い時期から様々なことに興味を持っていると、自分は何に興味があるのか、何が好きなのか、将来何をやりたいのかといったことも見えてくるはずです。そして、そこから興味を持ったことを徹底して突き詰めていくことはさらに大事なことです。



■先生

そうだね。

■卒業生

私は高校時代、自分が何をやりたいのか、なかなかわかりませんでした。日本の教育は与えられたものに自分をどう適応させるかを重視する面もあり、それが“好きなこと”を追求していく弊害になっているところもあると思います。

でも、そこは他者のせいにせず、自分が一番熱中できることを常に考え続ければ進むべき方向も見えてくるでしょう。そのためにも、世の中や社会はどうなっているのか、高校生のうちから関心を持っておくことが大切だと感じます。

先生からはいかがでしょう？

■先生

私と今の高校生とではかなり年齢的に距離がありますから、アドバイスしづらいところはありますね(笑)。

私が高校生の頃は関西で言う“いちびり”、いわゆる“やんちゃ”なことをするやつが多かった。そういう高校生に対しては「遊んでばかりではなく勉強もしなさい」と言ってあげてもいいでしょう。でも、真面目な高校生には「勉強ばかりしてはアカン」と言ってあげたい。私の知っている若者で司法試験の勉強に憑りつかれた人がいます。このままでは人生を棒に振ってしまうこともありうるのではと心配しています。もちろん合格できないことも問題だけど、そうやって目の前の勉強がすべてになってしまうと、世間に対する視野が狭くなり、周りもどんどん見えなくなって、自分ができるかもしれない他の可能性を見失うことにもなりかねません。

■卒業生

そうになると何のために勉強するのかわからなくなってしまいますね。

■先生

そう。結局私が言いたいのは、勉強も、自分が好きなことも、両方やるのが大事なんだと。受験勉強もやる時はきっちりやる。市川くんが言ったように世の中のこともしっかり見ておく。それを高校時代から意識しておけば、大学に入っても、社会に出てからも、自分の生きていく幅を広げる上できっと役立つことはあると思います。

大学構内のお気に入りのスポット

■卒業生

木下くんは新しいキャンパスで学べるんだね。

■大学生

はい。4年生の1年間ですけど、楽しみながら最後の大学生活を送ろうと思っています。

■卒業生

政策科学部を象徴する場所はあるのですか？

■先生

これまでの衣笠キャンパスでは「洋洋館」が本学部の学びの場だったよね。その建物の正面に“COLLEGE OF POLICY SCIENCE”の名称が入った古い木製の大きなアーチがあったのを覚えているかな？

■卒業生

もちろん覚えています。学び舎を象徴するアーチですよ。

■先生

そのアーチが新キャンパスでも再現されます。政策科学部の棟内にあるラウンジスペースに設けられ、そこで学生たちが自由にグループディスカッションを行ったりできます。将来的には本学部を象徴するスペースになるんだろうね。



●インタビューに答えてくれた方々



■先生

佐藤満先生

立命館大学政策科学部 教授

京都市立紫野高等学校出身。京都大学法学部卒業、同大学院法学研究科博士課程修了。京都大学法学部助手、福井大学教育学部助教授、立命館大学法学部助教授および政策科学部助教授を経て現職。『厚生労働省の政策過程分析』慈学社、『政策科学の基礎とアプローチ』ミネルヴァ書房など、政治過程論・政策・政策形成過程に関する著書・編書多数。

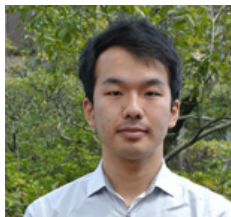


■卒業生

市川良一さん

株式会社 AGUA JAPAN 勤務

兵庫県立柏原高等学校出身。立命館大学政策科学部卒業。インターメディウム研究所を経て、衆議院議員泉健太事務所で秘書の仕事に携わる。その後、京都府長岡京市の市議会議員を1期務め、現在は株式会社 AGUA JAPAN に勤務。関西支社で環境ビジネスのソリューション提案および新規事業の開拓に取り組む。



■大学生

木下浩輝さん

立命館大学政策科学部3年生（2014年度取材当時）

大阪府立高槻北高等学校出身。大学入学後、政策科学を学ぶ上での基礎となるグループワークで問題発見・解決の手法や組織のあり方などを学ぶ。3年生より佐藤先生のゼミに入り「田中角栄から見たリーダーシップ論」をテーマに自らの研究に着手。大学入学時より所属している「将棋研究会」では会長を務める。